

あがのがわ流域再生プロジェクトについて

記録：藤田瑞祥

編集校正：古里貴士、原田徳子

聞き取り場所：菱風荘体験蔵

日付：2018年9月1日

【山崎 陽さん】あがのがわ環境学舎

1975（昭和50）年新潟県三条市生まれ。2011（平成23）年2月1日に一般社団法人あがのがわ環境学舎を立ち上げ、新潟県が展開する「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」を受託し、新潟水俣病問題が続く阿賀野川流域の地域再生や環境学習等への支援に取り組む。



地域の人の本音を聞くこと

今日のお話のタイトルは「二つの地域再生から考える あがのがわ流域再生プロジェクトのあらまし」です。



これが、昨日（※8月31日の現地視察時の座学で）も見ていただいた阿賀野川流域マップです。昨日の地図と若干違うのは、温泉地帯が書き込まれていることです。五泉市には咲花温泉があるし、阿賀野市には村杉温泉があるし、一番有名なのが麒麟山温泉です。昨日の地図では、あたかも公害の発生した土地であるというだけの印象を感じられると思うのですが、実はそこには全然別の、こういう温泉地や、他にもいるんな地域資源があるわけです。

公害だけを学ぼうと思って行くと、よく勘違いする人がいるんです。本当は公害だけじゃなくて、地域にはもっと違う側面もいっぱいあるんだよ、公害というのは単なる一つの見方で、他にもいっぱい切り口というか、見方があるということを持ち帰ってもらいたいというのが、阿賀野川流域に住んでいる人たちが思っていることです。阿賀町の人たちだけでなく、他の土地の人たちもみんな言います。逆に言うと、地域の人たちの協力があって地域再生が成り立っているのですから、地域のそういう要望は大切です。そうしないと誰からの協力も得られない。

でも、そういう本音を、最初に会ったときに話してくれる人は一人もいない。じゃあ、どうしたら本音を聞き出せるのか。仲良くなるのは意外に難しい。だって、初対面の人と急に本音を話せないでしょ。ほとんどの人は、最初みんないい人のような感じでしゃべってくれるんだけど、本音は語ってくれません。だから、地域再生をやるには、まずは本音を引き出すにはどうしたらいいのか、というのがハードルなんです。そのあと、今度はその本音をどうやって取り込むか。地域の人の本音も含めると、地域再生は公害一色でなく、もう少し違うものに変化します。

でも、そういう本音を、最初に会ったときに話してくれる人は一人もいない。じゃあ、どうしたら本音を聞き出せるのか。仲良くなるのは意外に難しい。だって、初対面の人と急に本音を話せないでしょ。ほとんどの人は、最初みんないい人のような感じでしゃべってくれるんだけど、本音は語ってくれません。だから、地域再生をやるには、まずは本音を引き出すにはどうしたらいいのか、というのがハードルなんです。そのあと、今度はその本音をどうやって取り込むか。地域の人の本音も含めると、地域再生は公害一色でなく、もう少し違うものに変化します。

地域再生プロジェクトの始まりとあがのがわ環境学舎の紹介

昨日は、昭和電工、原因企業の工場が建設され、そのあと昭和30年代に有機化学が発展し、その陰で新潟水俣病が昭和40年代に表面化した、ということまでお話ししました。

その間に、環境汚染とか健康被害とか地域の絆の断絶とか…、それから公害とは別に、地域は過疎化で衰退していった。そういうなかで4、50年が経過した中で、新潟県では、2007（平成19）年に地域再生のプロジェクトが本格的に始まりました。

あがのがわ環境学舎は2011（平成23）年、阿賀野市に事務所を設置します。仕事は「阿賀野川流域における地域再生事業」を担当しています。新潟県が事業主体としてあって、そこから事業を委託されているという形です。そ

れ以外にも、民間の事業もやっているし、全然別のところから補助金をもらったり、様々なところから仕事を得ています。

ちなみに、何で阿賀野市に設立したか。わかりますか。

阿賀野市は、ちょうど阿賀野川が山から平野へと抜け出るところです。山と平野の境界線なんですよ。だから、ブラタモリ風にいうと（笑）、ここは土砂が扇状地で広がっていて、その大地を生かした産業がすごい発展しているところですよ。

事務所を構えるのは、実は五泉市でも良かったんです。阿賀町には、無料で事務所を提供するって言われたんですが、行かなかった。なぜ阿賀野市か五泉市に事務所を構えようとしたかと言うと、最初にグリーンツーリズムに取り組もうという構想があったからです。第三種旅行業というのがあって、一定条件のもと国内の募集型企画旅行を実施することができるのですが、事務所が設置されている自治体に隣接する自治体までを含めて旅行可能なエリアにできる旅行業の資格です。その考え方では、この阿賀野市に事務所を置くと阿賀野川流域の中心あたりなので、隣接する新潟市・五泉市・阿賀町など流域全体をカバーできるんです。そういう理屈です。設立当時、集まった人がそう考えた。でも、グリーンツーリズムはうまくいきませんでした。

グリーンツーリズムとは何かというと、ツーリズムは、観光、ツアーですね。グリーンは農林水産体験ってことなんです。農業体験とか、林業体験とか、そういった職業の体験、産業体験をやるツーリズムです。ドイツなどでは、B & B（※ベッド&ブレイクファスト：宿泊と朝食の提供が主で、比較的低価格で利用できる、ヨーロッパなどにある宿泊施設のこと）などを活用しながら展開されています。要は、そういう経緯や事情でここに事務所を構えて、地域再生の事業をやっているということです。

一般的な地域再生事業をやる理由

最初は公害の地域再生の事業だけを新潟県から受託してやっていましたが、途中から、仕事の半分は一般的な地域



再生（※いわゆる全国の中山間地域で取り組まれる地域活性化）にも取り組んでいくことにしました。なぜか。

まず、公害の地域再生をやるといって「みんな、公害の理解深めようよ」とやっても、誰一人見向きもしてくれない。もともと公害問題に関心を示している人にしか理解が進まない。「もっと公害への理解を示してよ」と一軒一軒回っても、怪しい人だと思われてしまいます。だから、公害地域の再生をやるには、まず、地域が受け容れてくれるコンセプトを決めようと考えました。それが「光と影」です。

公害の報道を見たこと、ありますか。新潟日報も山のように公害の報道をやりますが、その多くは影の部分でしか構成されていません。そうすると、地域の人たちは「まだ、こんなことやってるのか」と、みんな言うんですよ。「俺たちの地域で、こんなこと考えている人一人もいない。なんでこんな報道ばかり延々と繰り返すのか」と。

こういう影の部分ばかりに偏っていると、地域の誰からも支持を得られないのですが、光の部分を入れていくと、渋々みんな賛同してくれるんです。「光も入ってるんならいいだろう」と。例えば、阿賀町の工場のすぐ近くにすごく公害に批判的なおじいちゃんがいる、でも「じゃあ、俺は光の部分担当な」って言って、私たちの取組に参加してくれて。それでいいんですよ。それでも、関わってくれることがまずは重要なので、みんなといい意味で妥協しながらやっています。これが、あがのがわ環境学舎の取り組む、公害の地域再生です。

なんでこの一般的な地域再生を真剣にやらなければいけないのか。一言で言うと、この阿賀野川流域に新潟水俣病のことばかり考えて暮らす人はほとんどいないということです。被害者の人も含めて、ですよ。この阿賀野川流域で、新潟水俣病のことをずっと考えながら暮らしている人って、我々の事務所と、ふれあい館（新潟県立 環境と人間のふれあい館 - 新潟水俣病資料館 -）の職員ぐらいでしょう。公害だけやっているのは、普通に流域で暮らしている人たちとなんの接点も持てない。

我々が流域の人たちと何か「協働」して取り組みをしたい場合は、流域の人たちが日々考えていることに近づけないといけないわけです。流域の人たちが日々、困っていることとか、改善したいと思っていることに、私たちも本気

で参加するっていうこと。その上で、「だからあなたたちも、公害のことにいろいろと参加してくださいね」と説得しないとダメだっということ、本当に真剣に入れています。

こういう考え方は、普通のお仕事にも通じていると思います。営業のお仕事とか。普通相手に言わないようなことー例えば悩みとか困っていることとかを、うまく聞きだしていく。人の本音を探るとか。それとすごく似ているんですよ。こういう考え方を基にして、事業を一般的な地域再生にも展開しています。

いろんな地域の人たちと連携して、地域に事務所を構えていると、必然的に協力者が多くなります。「ご近所だから、一緒に取り組みませんか」などという感じで。

関西訴訟判決を受けた動き

私達の取り組んでいる地域再生のプロジェクトは、フィールドミュージアム事業、略してFM事業と言っています。正式名称は「阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業」で、これは新潟県がつけた正式名称です。おおもとは環境省の水俣病関連補助事業です。

それから、当初関わっていた委員の人が、阿賀野川流域を「え〜とこ（良いところ）だ」と言われる地域にするって言うことになったことを言い出して、これが通称になってます。「阿賀野川え〜とこだプロジェクト」。個人的にはあんまり好きじゃないネーミングですけど、委員の人が「え〜とこ」が阿賀野川の方言だと勘違いしてつけてしまいました。

流域再生の背景ですが、一つは、水俣市で行われている「もやい直し」です。これは平成元年の前後に始まって、もう30年近く経っています。水俣市は新潟の大先輩なんで、新潟でも新潟版のもやい直しを始めたいよね、というのが前からあったんです。つまり地域再生の取り組みを行いたいと。

二つ目は、水俣病を巡る動きです。昭和40年代と、昭和50年代から平成にかけて、平成16年以降と簡単に分けてご説明します。昭和40年代は第一次訴訟、昭和50年代は二次訴訟。これが1982（昭和57）年から始まって、1995（平成7）年に政治解決で和解します。水俣も含めてほぼ全ての裁判が、一件を除いてここで和解する。そうすると、世間は盛り下がる。水俣病の動きはここで、ものすごく沈静化するんです。

ところが、そのたった一件残っていた訴訟ー熊本の水俣病で関西に移住した人たちによる「関西訴訟」ーは、2004（平成16）年に最高裁で、国の責任を認めるという判決が出た。これで、「やっぱり国に責任あるのだ」となって、動きがまた一気に加速し始める。これが水俣病全体の動きです。沈静化していたものが、2005（平成17）年から突如活発化し始める。それで、FM事業などいろんな補助事業が一気に立ち上げられて、動き出しました。

阿賀野川流域地域フィールドミュージアム事業

こうした背景で始まったのがFM事業です。2005（平成17）年度は、新潟水俣病の40周年の年だったんですが、当時県知事だった泉田裕彦さんが「ふるさとの環境づくり宣言」という方針を出します。これは「私たちの故郷を二度と汚さない」こと、それから「阿賀野川流域地域を地域再生していきましょう」ということを目標にしました。この宣言に基づいて、FM事業が本格的にスタートします。

2007（平成19）年に新潟版もやい直しを始めようということで本格的にスタートし、行政は、流域市町と地元の有識者といった人たちを集めて委員会をひらきます。有識者のお一人としては、例えば、旗野秀人さん（「新潟水俣病安田患者の会」事務局長）も入っていました。

FM事業が具体的に何に取り組んでいるかと言う前に、まず全体的な概要について説明すると、新潟水俣病地域福祉推進条例が制定された際に、新潟県の水俣病全体に関わる「課題の整理」が行われました。



社推進条例が制定された際に、新潟県の水俣病全体に関わる「課題の整理」が行われました。

まずは「福祉対策」。これは、県の生活衛生課が担当して、被害者の方の救済や医療・福祉対策事務が行われる。それから「教育・

啓発」としては、環境と人間のふれあい館が担当しています。最後に「地域再生」。この課題をFM事業で担当しましょう、という区分けがなされました。

このFM事業は、個別事業が複雑に組み合わさった集合体なんです。だから全体像を理解するのは大変なんですけど、簡単に言うと、基本の三事業と、その三事業を下で支えている土台の三事業と、大きく二つに分かれます。

表に出てくる基本の三事業である環境学習・イベント・情報発信というのは、日本全国津々浦々どこでもありますよね。FM事業の独自性は、この三つの事業を下支えている、表には見えない活動です。一つはロバダン（炉端談義）。二つ目は資料整理。最後は作品づくり。この三つで、この上の三事業を支えている。こういう構造になっています。

ロバダン（炉端談義）—大事なことは少人数で本音で話す



まずロバダンの紹介です。「ロバダン」とは、炉端談義を略して、ロバダンと言っています。「大事なことは少人数で本音で話す」。これがロバダンの出発点です。

これがどういう役目を果たすかということ、阿賀野川流域の人たちから本音を聞き出すってこと。本音を聞き出すと、人って仲良くなるんですよ。仲良くなると、いろんな情報を言ってもないのに教えてくれるんですよ。

炉端というのは囲炉裏端って言いますが、囲炉裏を囲めるのって、せいぜい10名くらいです。だから、炉端談義というのは、全部で10

名くらいで、くつろいで話れるような、そういう少人数の寄り合いのことです。10名くらいの人数じゃないと本音が話せない。20人が集まって、そこで本音って話しやすいですか？ なんか会議の場みたいになるでしょ。そりゃ、人前で話すのが得意な人は楽に話せるけど、そういうのがあまり得意じゃない人にとっては難しい。だから、どうやって本音話を話してもらいたいかということを通して、このロバダンのスタイルにして、本音が出てきやすくなった、ということです。

流れとしては、FM事業などを通じて収集した昔の写真などの史料を見せる。そうすると、おじいちゃんやおばあちゃんはすぐに関心を示してきます。昔の写真などの歴史資料は大好き、みたいな感じで。そういう形でハートを掴む。しかもこれ、お茶菓子を必ず出すんです。この流域にもいろんなスイーツ屋さんがあるから、そういうところから調達してきて、お茶菓子でも食べながらいろんな話ませんかという環境の中で進めると、様々な昔の話や本音が出てくる、出てくる。そういう流れで、ロバダンはやっています。

例えば「実は私は流域に関するこんな宝物を持っているんです」と、自ら進んで見せてくれる人がいます。そうすると、今度は別の人も、自分が持っている資料をいっぱい見せてくれる。そうして、みんな資料の自慢をするわけです。それを我々は資料整備のためにお借りさせていただくことが多い。これが、先ほどお話しした、FM事業を下支えている活動の二つ目の資料整備につながります。

すると、阿賀野川流域の資料が山のように集まってきます。今度はこれを活かして作品にするんです。昨日、プログラムの最初に映像作品がありましたが、あれはこの資料整備を通じてで全部収集されて作ったものです。こういう収集の仕組みを通じて作られているんですよ。あの映像作品もなかなか興味深かったでしょ。

この「ロバダン」って名前も、委員の一人の先生が、「炉端談義って、なんか硬いよね。略してロバダンでいいんじゃないか」と言って、デザイナーが（炉端談義と関係のない）ロバをあしらったロゴマークまでつけちゃって。私個人としてはそういう軽いノリが嫌いで「そのロバじゃない」と思ったし、すごく反対だったんだけど、当時みんなそういうノリだったんです。また、こういう軽さやノリも、誰もが参加しやすい雰囲気づくりにつながったのかもしれない。

ロバダン!三原則

ロバダン!三原則というのがあります。まず、新潟水俣病のもやい直しが目的とはっきり伝える。それから、相手の言い分にはまずは耳を傾けて、（たとえ間違っている）言下に否定しない。最後に、共通の価値観を探る、共通の価値観を広げる。今これサラッとだけ言いましたが、例えばお仕事で営業をやっていく時などにも共通する、重要な

観点なんです。

最初の原則として、新潟水俣病のもやい直しとしてやってるんですよって伝えないと、「公害のことなんて絶対関わりたくなかった」「引き込もうとして、俺をだましただろ」って言われる可能性もありますから、この部分はロバダンをやる前に必ず伝えないといけない。

それから、2番目の原則の「相手の言い分に耳を傾ける」。例えば、阿賀町で「水俣病の本当の原因って、農薬水銀なんでしょ」と言う人は、実はいまだにいるんですよ。これを「あなた、違いますよね」とか「全然正しくないですよ」と否定すると、もうそこで関係が終わってしまう。だから、まずは全部一旦、聞きます。よく傾聴って言うじゃないですか。それでたとえ相手が間違っただけの言い分をしていても、長く関係を続けて行く中で、「私ももしかしたら間違っていたかも」と気づいて言ってくれるようになる。本当に、手紙で伝えてくれた人もいます。だから、長く信頼関係を続けていくことが極めて重要なんです。

最後に「共通の価値観を探る」。これすごく難しいんです。一つの話はそんなに長く繋がらないから、次の相手に話をしてもらいやすくなるために、こちらからうまい質問しないとイケない。ナチュラルに、相手が違和感覚えないように、話をどんどん引き出してつなげていくことが重要です。そうしないと、耳を傾けてもらえない。もう一つは、私たちは、聞いているフリをして、実は必死に相手と共通の価値観を探っているんです。例えば、この人と一緒に仕事できそうとか、この人この部分に興味持っているんだしたら、その情報持ってる方とつなげよう、とか、そういう何らかの接点やつながれる価値観を見つけないと次に繋がらず、会う理由がなくなる。すると、そこで関係が途切れるから、共通点を見出してなるべく関係を繋いでいかないとイケない。

あとは最後に「話題はなんでもオッケーですよ」「これは新潟水俣病の事業ですけど、別に新潟水俣病のこと話さなくてもオッケーですよ」と最後に言ってあげる。そうすると、新潟水俣病のことを話したくない人でも参加してくれる。そういう人に限って、新潟水俣病の話を出してくれる人が多い。そういう興味深い点があります。

ロバダン！から事業をつくる

というわけで、水俣病の意見収集をしていって「ロバダン！を通して見えてきた様々な本音」をまとめました。これらは実際出てきた意見で、下流の方で出てきた意見、中流の方で出てきた意見、上流の方で出てきやすい意見というように分類しています。通常の公害学習の中では、あまりお目にかからない意見があると思います。地元の人たちが結構こう言う意見を出してくれるんです。これは（地域再生を進めようとする）私たちにとって、重要な「接点」になります。「あ、その切り口で事業をつくっていけばいいのか」と、事業全体のコンセプトにつながりうるんです。

ロバダンを通して見えてきた様々な本音

「公害発生当初、様々な人々が地域に入り込んでくれたため、距離を置くようにならなかった」
 「公害の被害者は可哀そうだし、自分の身近な人の中には、関わりたい人もいた」
 「不況で地域経済は低迷し生活は苦しい。FM事業と私達の接点が見えづらい」
 「大河の恵みで育った農産物を、阿賀野川ブランドで売りたいが現状では難しい」
 「公害があったため、農産物の若い世代には、敬遠に自覚が持てない書もある」
 「影の側面に集った意見が多すぎる。せめて光の側面も併せて伝えてほしい」
 「新潟水俣病の原因は農薬水銀であり、昭和電工はあまり関係ないと思っていた」
 「新潟水俣病のことはあまり語りたくないが、地域が疲弊した現状は何とかしたい」

知覚	被害や被害を正しく知らない、若い人は無関心、歴史知識の被害者へは関心しない
不満	○不正確な知識を持つ参加者が多い一方、真実の若い人の多くはほとんど知らない。 ○基本的に被害者に同情する人が多いが、農産物には疑いの目を向ける人も少なくない。 ○話す機会がなかった、聞いてくれる人がいなかった、一方的な意見、かみかみ
期待	○公害は歴史という人ほど「今まで隠も聞いてくれなかった」とロバダンでは積極的に話す。 ○隔った見方や伝え方に不満を抱く人が多く、「光と影」という視点を提示してくれた。 ○地域への誇りが持てない、疲弊した地域を再生させたい、阿賀野川ブランドを誇りたい ○船橋水俣病に対する考え方は人によって異なるが「自分と人の関係性」をテーマに議論が深まっている。 ○地域の影に向き合えないために、地域の物もべきまもんで困ってしまう場合が多い。

上流では「影の側面に偏った報道が多すぎる、せめて光の側面も併せて伝えてほしい」という意見が出て、この発言は第二回目のロバダンで、原因工場の近くに住む地域の老人たちが語ったことです。私たちはこの発言を参考にして、FM事業は今後全て、「光と影」という観点から推進していこうという方針にしました。ロバダンは2012（平成24）年までの4年だけで120回、現在までに300回以上やっています。

資料整備として収集した写真の多くは、地元の人たちから提供していただきました。そうした昔の阿賀野川の様々な史料を使って、阿賀野川流域の人たちに訴求できる作品が作られる。ただし、史料の現物をいただいても責任をもって保管できないので、ほぼすべて持ち主に返しています。お返しする前に、高細密に電子データ化して保存しています。データ化しているからこそ様々な作品にすぐ使いやすく、例えば流域の歴史を紹介するスライド資料などもをすぐにたくさんつくったりできます。そういう史料データを活用して作品づくりにいそしんでいる訳ですが、その中でもパネル巡回展は毎年開催していて、これまでに9作品出来ています。特に、解説より写真をメインに始めた数年前から、非常に評判良くなっています。

若い人はあんまり興味ないかもしれないけど、50代以上の人だと昔

資料整備 ～かつての流域の魅力力を強く語る昔の写真群



の写真や歴史にすごく関心を持つんですよ。パネル作品は大体40～50枚くらい。大きさはA1からB3くらいまでなので、結構迫力があります。もちろん、写真だけを見せていくんじゃなくて、様々な解説も加えてあります。じっくり見て深く学ぶこともできるけど、写真だけを見て気軽に楽しむこともできるという感じです。

それから、基本の3事業の方になります。イベント。地域再発見講座ということで、これまで20回くらい開催しています。鉄道だとか、船のイベントなので、水俣病がまったく関係ないと思われるかもしれませんが、しかし、重要なのはそこなんです。要は、地域再生のイベント

の場合、公害の要素を全体の二、三割に抑えた方が良く考えています。公害問題や運動にコミットする人は、イベント内容ががほしい公害100%で占められるんですよ。そういうイベントに来る人たちは、地元の人が来る割合が少なく、最初から公害問題に深く関心のある人たちがおおい来ます。でも、地域再生って、公害にあまり関心を持ってない人にこそ来てもらいたい。それで、公害の要素をイベント全体の二、三割に抑え、それ以外の要素を七、八割に増やしました。そうすると、ほぼほぼ地元の人が参加するようになる。その中で、公害のことを結構伝えられたりするんですよ。そういう戦略でやっています。様々な取組は、そこに至るまでの導線をしく準備のようなものです。

まとめとしては、公害問題に特化していると多分、地元からの協力を得られにくくなるけど、公害を含む地域の歴史全体を視野に入れると急に多面的になって、地元の人を受け入れやすくなるということだと思います。公害問題への関心が高い人は、被害と加害、支配と被支配、こういうふうな二項対立で問題を捉える人がすごく多いんですよ。こうした2項対立の枠組みで捉えると、これは専門的なようでいて実は非常に単純化された見方で、この阿賀野川流域に対する理解やイメージが狭い範囲の中で固定されてしまう。それを避けたいから、必ず多面的になるようにしています。多面的な枠組みの方が圧倒的に阿賀野川流域の人に受け入れやすいし、地元の人が地域に対する誇りとかも失わずに済むんです。

地域資源を掘り起こす

それから、公害の地域再生以外でやっていることを紹介します。

ロバダンをやっていると、水俣病の本音を聞ける以外に二つ、いいことがあります。一つは地域の宝物を発掘できる。



もう一つは、ネットワークが急速に拡大していくということです。流域で活躍する様々な人たちと、情報交換したりだとか、一緒に事業やったりしています。

例えば観光協会とか温泉組合の人たちと一緒に事業やイベントをやる。小田製陶所という地場産業の会社が、うちの事務所のすぐ近くにあるんだけど、蒸しかまどという製品を70年前まで作っていて、これを私たちに自慢しに来てくれたんです。この蒸しかまどは何かと言うと、炊飯器なんですね。高級寿司屋さんだと、ものすごく美味しいシャリを炊いています。実はこの蒸しかまどで炊いている場合が多い。これで炊くとすごく美味しいお米が炊けるんです。この小田製陶所が阿賀野川流域で唯一作っていたから、これをミニにしませんかと提案しましたところ、小田さんが努力されて製品化した。昔のままのサイズだと大きすぎて、燃料に木炭が必要になるから、家で炊けないんです。そこで、ミニサイズにしたところ、固形燃料で炊けるようになって、今は環境学習舎で販売サイトを作ってネットで売っています。小田製陶所の公式販売口という位置づけになります。そこまで売れている訳ではなく、今は売れたのは4機くらいですが、4機でも一機5万円のものが4機で20万、それが一年続くとまあまあになりますよね。一気に5台とか買っ



てくれる人もいますし。過去には、小田製陶所さんと一緒に東急ハンズまで売り込みに行き、実際に扱ってもらっています。本気になって地域再生やるというのは、要は、一緒に東京のデパートまで売り込みに行くぐらいのことをするという事です。そうやると、みんなから「ああ本当に真剣なんだな」と感じてもらって、こちらにも協力してくれます。

あと、泥漬けというのがあるんですよ。これは安田瓦の職人さんたちが、瓦の原料の粘土に野菜を漬けて漬物にして食べる泥漬け。こんな珍しい食べ物、めちゃくちゃ商品になりそうじゃないですか。ただし、商品化に当たっては(食品衛生法上) 保健所の問題があって難しいんですが、今渡戸たちは泥漬けを漬ける粘土の方を売っていて、この間などは20個の注文が来ました。そんな感じで地域資源を掘り起こして商売ができるということを今、やっています。

次が「豪華な粗食」。阿賀野川流域をロバダンして回る中で、様々な料理を教えてもらったので、それらを一つのお膳の中につめたものをイベントごとに出していました。

最終的には、それらがツアープログラムへと形作られていきました。公害学習の「あがのがわ環境学習ツアー」には、鹿瀬工場の光と影の歴史をたどるプログラムだけではなく、被害者の人たちが現地で語るプログラムもあります。この被害者の人は船頭さんで、阿賀野川を眼の前にして語っていました。また、公害のプログラムだけではなく、地場産業を体験できるプログラムもあります。阿賀野市で言えば、安田瓦のプログラム、小田製陶所のプログラム、それから酪農のプログラム。こんなふうに、阿賀野川を代表する地場産業の人たちとも仲良くなって、全部プログラム化していくと、非常に大人気のプログラムとなった。これ以外にもたくさんプログラムをつくっていて、鉱山、銅山のプログラムもつくっています。あとは阿賀町の自然体験のプログラムとかつくって、最終的にはそうした公害学習プログラムと産業・自然体験プログラムとを組み合わせ、阿賀野川流域の訪問者へ提供しています。

阿賀野川流域が公害だけの土地みたいなイメージになるのではなく、こうやって阿賀野川流域で自然体験、産業体験をする。そうすると、光と影を同時に体験できるから、阿賀野川流域に対して全く別の感想やイメージを持って帰ってくれるんです。それが我々、あがのがわ環境学舎が行っていることです。こうしたツアーも運営できるようになるために、あがのがわ環境学舎が設立されたんです。

光と影の歴史を伝えるプロジェクト

最後に最近の動向を紹介して終わります。昨日、皆さんから視察していただいた現在の工場の排水処理の取組を学ぶプログラムは、5、6年前から始まったんです。原因企業が一緒になってやってくれるって、他の公害地域ではあまりない事例だと思うんですが、それまで昭和電工さんは、私達の地域再生の動き観察されていたのではないかと思います。

それで、ここなら手を組めそうだ、一緒にやれそうだなどという事で、我々がお声がけた時にオーケーのお返事を出していただけたんだと考えています。このように、原因企業さんとも一緒になってお仕事ができる関係を築くということも、実はすごく重要だと思います。

もう一つが、今年度は阿賀町の教育委員会と一緒に、環境学舎が中心となって公害学習の補助金を獲得しまして、草倉銅山、鹿瀬ダム、鹿瀬工場といった近代化遺産の光と影の歴史を、小中学校向けの教材にするというプロジェクトが進行中です。これは、ステークホルダー同士でコンソーシアムを組んで実施することが条件となっていて、阿賀町教育委員会、阿賀町役場鹿瀬支所、環境学舎、昭和電工さんなども入っています。この6月には昭和電工さんからも会議に参加していただき、一緒に話して、意見を交わす、という感じです。

この新潟水俣病の経験を通じて、清らかな水を決して汚してはいけないという教訓を阿賀町では得たので、今は逆にものすごく清らかな阿賀町の水を活用して、すばらしい商品が作られているんだ、ということを感じてほしいというのが阿賀町の方々の要望でもあるわけです。そのうちの一つはお米です。阿賀町のお米は現在、バカ売れしているんですよ。どこも今は売り切れ状態で、かなり高い値段で取引されています。



それは阿賀町の山の方で作られているお米だから。山から流れてくる清水で作った米って、とっても美味しいんです。それが全部、阿賀野川にも流れ込んでいる。阿賀町の清水でこんなに素晴らしい商品が作られているというこの物語。

もう一つはお酒。日本酒も酒米が原料になりますし。仕込み水って阿賀町の大地を流れる伏流水で作っています。だから、日本酒もやっぱり決め手は水。麒麟山酒造さんなんかは森林整備をされていて、上流の森林を整備しないと良質な水は手に入らないからです。そうした事情から、こうした物語を埋め込んでくださってことで、私たちは教材を

作って、それまでの近代産業の光と影の歴史を伝えるというプロジェクトに取り組んでいます。